※過去に掲載された記事になります。内容は公開時のものであり、最新の情報とは異なる場合がございます。

スタッフ一覧へ／第一話　壊れないＰＣを作りたい！へ

このコンテンツ、あなたの評価は？ ○ おもしろい ◉ ふつう ○ おもしろくない 送信

© Panasonic Corporation

ism モノづくりスピリッツ発見マガジン

Archives

SHARE

▶ コンテンツ一覧　▶ このサイトについて

ホーム > ism トップ > PCは鏡と比かたてタブになる。 ~ノートPCとタブレット~ 第一話 「使いなりPCを作りたい」

※表示に必要なプラグインがインストールされていません。表示には最新のFlashが必要です。最新の情報は表示を推奨されます。

PCは鏡と比かたてタブになる。
~ノートPCとタブレット~

第一話

「使いなりPCを作りたい」

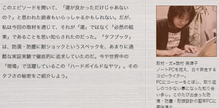
犯罪大国・アメリカ。
その日も某都市では、美しいカーチェイスの末に1台のパトカーが横転。
大破していた。

もはや廃棄不能、スクラップとなる運命が一日間悪況の中を待つ。
奇跡に耐え生き残ったモノがある。

産業（ビッと電所）のあたりでご注目いただきたい。
生き残ったモノ・・・それは、1台のノートPCだった。

事故車から取り出されたそのPC、さすがに激温は破損していたものの、
頑強にあるハードディスクとほぼダメージなし。中に保存されていた
貴重なデータは、すべて無事に引きだされたのである。

このPCこそ、全世界で高い評価を得ている
雪中ノートPC「タフブック」シリーズ。



※過去に掲載された記事になります。内容は公開時のものであり、豊新の情報とは異なる場合がございます。

第三話
「タフなツールの代名詞を目指せ」

"タフ"を名乗れるスペックとは？

山田氏、原田氏は はじめとするスタッフ全員の熱意と根性でもって、1996年「クフブック」シリーズの第一号機となる「CF-25」は世界デビューを果たした。念願の独自コンセプト商品の立ち上げである。その性能は？市場の反応いかに！？と、はやる私に、デザイナーの樋木氏はこんな質問を投げかけてきた。

「"タフなモノ"と言われて、何を思い浮かべますか？」

"タフなモノ・・・"。と、いきなり言われても、私の頭の中はもうすでに「クフブック」で一杯。強いて思いつくのは、「G-Shock」や「ゼロハリバートン」などだろうか？樋木氏は私の答えに大きく頷いた。

「そうなんです。そういうタフ"の代名詞になっているようなブランドと、質を並べられるくらいのプレゼンスをクフブックも持てるように、そんな思いでこのシリーズに関わってきました」

かけがえのないデータを堅牢ボディで守り抜く「クフブック」。その コンセプトと説得力を持たせ、「タフの代名詞」の仲間入りをさせるに値する具体的なスペックはどんなものだったのか？樋木氏によれば、従来「取り扱い注意」の代名詞のように思われていたノートPCを、入々に「タフなモノ」と言わしめるためには次のような厳しい条件が。耐衝撃、耐振動、防塵、防磁だ。

「まずは落下などの衝撃に強いこと（PCが壊れる原因の第一位は、"運搬中の落下"。第一話のコラムを参照）。CF-25は、その耐落下高度が70cmに達した。当時、ノートPCでこの高さからの落下に耐えられるものはなかったんじゃないでしょうか。

70cmというと、ちょうどオフィスの机とから床までの距離。卸でうっかりコードを引っ掛けて本体ごと床に直撃！という恐怖などで起きても、意思の事態は避けたい。と、樋木氏によれば、最新の機種によっては90cm～120cm落下にまで耐えられる。これは「ノートPCを抱えて歩いていて、うっかり落としてしまった時」の高さをターゲットにして、さらに進化させた結果だそうだ。

「それと同時に重要なのが耐振動性。ビジネスにおける車での移動が多い欲求では、助手席にノートPCを無造作に放り出しで起動を移動することもザッです。車の振動というのはランダム周期かつ持続的で、精密機器には結構負担がえさいんですよ。そんな組から揺れにさらされ続けても、動作に影響が出ではいけませんし

さらに重要なのが、防塵性、そして防磁性。

「トラブルの原因を調べると、オフィスでもキーボードの上にコーヒーをこぼしたり、屋外で雲然の雨に降られたりといった理由も多かったんですね。ですから、水や塵が入り込む余地を作らない、ということには気を使いました」

私も実際にCF-25をチェックしてみた。側面を見ると、各種ポートやジャックなどの開口部は全てカバーで無造作に放り出しで起動を移動することもザッです。車の振動というのはランダム周期かつ持続的で、精密機器には結構負担がえさいんですよ。そんな組から揺れにさらされ続けても、動作に影響が出ではいけませんし

「上の部分を取り外せばわかりますが、キーボードの上に水がこぼれてもキープレートの下に入るだけで、CPUやハードディスクがある肝心の内部機器は完全に遮断されているんです（詳細は第3話でご紹介）」

なるほど、「クフブック」は全身まさにアリどころか、水滴の入り込む隙間もない。のであった。

アメリカ侵略！ バトカーハイテク化作戦

いわゆる精密機器が苦手とするものに対して、ここまで良っ向から挑んだ商品を私は見たことがない。私が経費削減に動しむ経営者なら、即採用したいところである。でも、実のところはどうだったのだろうか。営業部隊を引っ張ってきた原田氏に、そのあたりを聞いてみた。

「CF-25の完成と時期を同じくして、アメリカで"警察車両をPCで情報化する"、という国をあげての プロジェクトがエなとがったんです。あまりのタイミングの良さに、偶然は はじられませんでした」

アメリカでは当時、パトカーと本部のコミュニケーションは無線だけで行われていたそうだ（そういえば、昔テレビで見た刑事ドラマでも、無線でやり取りするシーンは定番だった）。しかし、年を追う毎に犯罪は多様化・増加する一方。そこで当局は、パトカーの機動力向上によって対抗を図る事にした。その具体策がPC搭載によるパトカーのハイテク化だである。

「パトカーが情報武装することで得られるメリットは数え切れないほどあります。不審車両のナンバーや現場急行時の地図といった情報が瞬時に確認できるわけですからね」

そういうわけで当局が探していたPC像に、CF-25はピタリとはまった。「このチャンスを逃す手はない！」職員との距離が一番近いのが営業の原田氏。早速、現地米国販売会社と共に営業専用の営業部隊を立ち上げた。そんな自由な動きが許されたのも、「現場主義」を貫こうとする彼らの熱い信念あってのことだった。

「アメリカは速則即ですから、各州警、自治体警察それぞれ個別にアプローチするんです。朝から晩まで、毎日毎日。アメリカ全土で2000箇所以上は売り込みをかけたんじゃないでしょうか」

2000箇所以上！？しかもアメリカの広大な土地を機新しながら、である。私は想像しただけでバテてしまった。ともかく、原田氏の頑張かつそれにて「クフな」営業活動のおかげで、CF-25はあちこちの警察で採用されることになる。そして次のような言葉に、私はまたもや度肝を抜かれることになった。

「クフブックに、戦警戦の跳弾（他の場所に当たって、跳ねかえった弾丸）がヒットしたが、それでもちゃんと動作した！・・・嘘かホントか、これなら評判が広がりますね」

第一話で情報化したパトカーの写真をご覧いただいたが、「クフブック」は弾丸までも弱ぎていたのである！！

「その評判のおかげで、警察だけに留まらず、FBIなど、国家機密レベルの情報を扱う政府機関にも続々とクフブックの採用が決まっていきました」

まさに、「頑丈PC」を求める潜在マーケットの可能性に賭けた、原田氏の読み通りの結果となったわけである。

ああ無情…の「アウト宣告」に驚愕

しかし、喜んでばかりもいられない。モブルチェリンの激しいPCの世界、他社の追随も許さないために、開発先への入念なリサーチが続けられた。原田氏は次期モデルの開発を進め、2年後に後継機種のCF-27が世に出ることになる。その頃には、「クフブック」という名前は、文字通り「タフの代名詞」ブランドとして欧米に認知され、各地で引っ張りだ ことなったのであった。めでたしめでたし・・・と行きたい所だが、ヒット商品の例にもれず、発展の影に潜ひ、納入先が多岐に渡るほど、PCが使われる環境もケ差別的になり、思はは問題点の想像もしなかった事件（？）が生じてしまうものだ。原因は、米国警察と商談を進めていた時のウラ話を教えてくれた。

「パトカーに よる現夜の張込み時でもPCが使えるように、"バックライトで点るキーボード"を開発した訳のことです。きっと喜ばれるだろうと思っていたら、最初は一目見るなりダメ出し。"手元がこんなに明るく光ると、張込みがバレ目撃されちゃうよ"。さすがにそこまでは想像ができませんでしたねぇ」

ここで問題がさてもらうには面白おかしい話だが、確かに彼らにとっては、命に関わる問題である。「クフブック」が活躍するフィールドー最前線とはいう意味を改めて再認識させられるエピソードといえよう。そして2年間にCF-27がデビューしてしばらくたったころ、原因氏はまた大きな問題に ぶつかった。

「ある欧州機関に納入させてもらうために、製品の採用試験を受けていた時のことです。場所はアリゾナの砂漠地帯。それが想像以上に過酷だったんですねぇ」

アリゾナ州では、昼場の気温が40℃を軽く越える。その日も地上とは別物の太陽光が照り付けていた。炎天下の中、何時間にも渡ってテストを受けていたCF-27、その液晶画面が突然真っ黒に変色してしまい、何も見えなくなってしまった。液晶がオーバーヒート（？）してしまったのだ。

「"ユー・アー・アウト！"なんて言われちゃいましてね。これはまたやり直しだな、と」

だが原田氏は、すぐにこう付け加えた。どんな結果であれ、お客様の反応を自分で直接見聞きできることが、我々が確立して ほ ざ イ ク ラ な 営業スタイルのメリットだと。

「その時も、液晶がなぜ変色してしまったのか、すぐ日本に結果を持ち帰って改善の手立てを考えました。もちろん、そこで終りになるのが 技術開発 で。

高温下で液晶がブラックアウトするというハプニングに見舞われた「クフブック」。次回は、その問題を見事解決しての けた技術スタッフをご紹介。そして 日 ミ モ ー レ ッ ク 実験ラストが行なわれている実験室へ、いよいよ潜入！

第三話 「潜入！クフブックの実験場」に 続く。

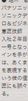
取材・文＝西村 崇子
ノートPCを抱え、日々奔走するコピーライター。
PCにコーヒーを こぼし、取り返しのつかない事になったモノ幾いきし。ことなら 出会った先 第一話・第二話・ 取材協力に協力PCに異味津々。

「タフブック」シリーズ第1号機となったCF-25。

● 山田 重郎氏
パナソニック
AVCネットワークス社副社長
当時の海外営業部長として「クフブック」というクフクンのエ 生 上げに尽力した、まさにシリーズの生みの親。

● 原田 秀規氏
IT プロダクツ事業部 海外法人PC事業部長 カテゴリーオーナー
イギリス、アメリカでの営業経験を通じて「クフブック」の 品 質 す べ き方向性の確立に貢献。製品が使用される世界中の現場を、自 ら の 足 で 体験して来る。

● 樋木 都生氏
パナソニックデザイン社 パナソニックデザイングループ プロ ダ ク ト ビ ジ ネ ス デ ザ イ ン チ ー ム 第三次部
入社2年目にして、シリーズ第一号となった「CF-25」のデザインを手がけた。「デザイン」は、ま く ま で も ファンクションを表現するものであることと、いう信の重さが、現モデルの意思に 結 び と 思 い 始 め た ら い。



CF-25の 実 面、 全 て カ バ ー 覆 わ れ ている。

こ ち ら は 最 新 モ デ ル の CF-1 な。 禁 ロ 部 一 つ ー つ に ラ バ ー シ ー ジ ング付きのカバーがある。

近年は自 バイやボリスバイクにも、クフブックのコンパクトモデルが愛 量 されている。

CF-25の 後 部 側 壁、CF-27。

ドライバー 無しでバッテリー交換やHDDの取り出しができるなど、メンテナンス性 ・セキュリティ性も 売 上 た。

「ものづくり」はまるごとクリーンルームでスタート

ism マイクロスコピック開発ヒストリー 第1回 「原点！ クアッパの実験場」

ism マイクロスコピック開発ヒストリー 第2回 「ものづくりの実践場」

ism マイクロスコピック開発ヒストリー 第3回 「ものづくりの実践場」

ism マイクロスコピック開発ヒストリー 第4回 「ものづくりの実践場」

ism マイクロスコピック開発ヒストリー 第5回 「ものづくりの実践場」

ism マイクロスコピック開発ヒストリー 第6回 「ものづくりの実践場」

ism マイクロスコピック開発ヒストリー 第7回 「ものづくりの実践場」

ism マイクロスコピック開発ヒストリー 第8回 「ものづくりの実践場」

ism マイクロスコピック開発ヒストリー 第9回 「ものづくりの実践場」

ism マイクロスコピック開発ヒストリー 第10回 「ものづくりの実践場」

ism マイクロスコピック開発ヒストリー 第11回 「ものづくりの実践場」

ism マイクロスコピック開発ヒストリー